

# 秘密女子と國寶

—上海と東京の『*Lucille Love, Girl of Mystery*』—

白 井 啓 介

## *Lucille Love, Girl of Mystery* in Shanghai and Tokyo

SHIRAI, Keisuke

本文专门探讨1910年代初期外国电影（洋片）传入中国与日本之际二者接受方式之不同。1910年代中期上海电影放映事业方兴未艾，国产片尚未出品，沪上所有电影院都为样片所垄断。所引进的洋片各色各样，有法国，意大利的滑稽片，也有意大利的大型历史文艺片，后来还有法国的侦探片，美国的系列惊险片（serial）和滑稽片等。洋片的引进作品上海与日本各有所好，引进时期也有所不同。意大利大型历史文艺片的放映，日本明显早于上海，发行上上海处于日本之后的位置。

1915年美国系列惊险片《*Lucille Love, Girl of Mystery*》在上海开映时其中文片名的翻译为《秘密女子》，与此相对一年后同一个洋片1916年在日本放映时的译名却为《国宝》。围绕二片名翻译之不同进行多方考究，又经过对其他洋片引进上海与日本时期之先后关系的对比分析，得出一个引人注目的新视角。上海先于日本引进的洋片，即直接自欧美引入沪上的影片其片名的翻译不受日本影响而多具中国特色，与中国传统戏曲或通俗小说的题名相近。由此可知洋片引进时期的先后与其片名的翻译有着一定的互动关系。

## 1. はじめに—外国映画の訳題

「映画」<sup>1</sup>は、発明草創期は、アメリカとフランスで多少の時差はあるもののほぼ同時期にスタートした。それは、工場の出口とか、駅に到着する列車とか、海辺に打ち付ける荒波、厩の火災での避難の様子、鍛冶屋で鉄を叩く作業風景、曲芸師が綱渡りする様子とか、さらに少し人為性が加わって園丁が水を撒くのをいたずらするとか、要するに動きがある情景を捉えるだけのものだった。この時期には、*Arrivée d'un train à La Ciotat* (ラ・シオタ駅に到着する列車) といった、まさに、被写体そのものを表したに過ぎない題名が与えられていただけだ。したがって、これを自国以外で放映する際にも、特に注目を惹く題名が与えられることもなく、甚だしきにいたっては、題名など頓着することなく、ただ「活動写真」とか「活動影戯」とか普通名詞で代用される場合もあった。

この映画が、作品性を持つようになり、それにその内容に相応しい題名が付されるようになると、出品国の言語をいかに翻訳し伝えるかに、一工夫もふた工夫も加えられてそれを受け容れる国や社会の文化的偏差が現れるようになる。映画の放映は世界各地に瞬く間に展開したが、こと撮影に関しては、各地の取り組みに時間差が生じていった。日本では、シネマトグラフ伝来の翌年1898年には『芸者の手踊り』等が試みられた後、同年に駒田好洋によって『ピストル強盗清水定吉』が撮影されて、国産映画の取り組みはほとんど時差なく進んだ。これに対して、中国上海においては、映画の放映は世界の動きと軌を一にしながら、国産映画の撮影はその後25年の時間を要した。だが、国産映画の取り組みのみがその社会の映画受容を示す指標とはいえず、輸入伝来する映画をどう受

<sup>1</sup> 当初は、リュミエールの cinématographe とエジソンの kinetoscope からその改良型の vitascope に始まるが、その後名称は cinéma や motion picture、movie、film 等々へ変遷する。一方、アジアにおいては、中国では「活動影戯」から「電影」へ、日本では「活動写真」から「映画」等へと変転するが、ここではこれらを一括して「映画」と呼称する。

容したかにも、それぞれの社会の文化的成熟度や価値観が示されることになり、同じ映画でありながらそれぞれの文化的フィルターを通すことによって、結果として異なる訳題が生まれる。ここに、それぞれの社会における外国映画（洋画）の受入れ方が端的に示されるといえよう。

## 2. 世界映画史の中で

まずは、上海での外国映画（洋画）放映の実情を確認する。

上海では、1897年に初めて活動影戲（映画）が放映され、当初は上記のような「記録フィルム」的な映画がしばらく放映された。初めは茶園という芝居小屋兼サロンで放映されたが、翌年1898年からは園遊会的な娯楽遊興場である「夜花園」で、江浙地方の音曲を伴う語り物である灘簧（後に滬劇や蘇劇等の地方劇に発展する）や戯法（手品・奇術）と併せて上映されるのが定式化してゆく。夏場であれば、これにさらに仕掛け花火を加えて彩りを添えていた。つまり、映画が作品として単独で放映されるのではなく、アトラクションの一つとして見物の目を惹く演目に過ぎなかったのだ。

その後、世界中の映画の一時的衰退につれて、上海でもしばらく沈滞を余儀なくされるが、1908年には常設の活動影戲園（映画館）が登場して、いよいよ映画放映興行は勢いを得ることになる。ただ、この常設映画館も当初は前例踏襲で、夜花園と同様いくつかのアトラクションを混ぜて興行されていた。ただし、さすがに室内に移行したため、花火が併演されることはなくなった。

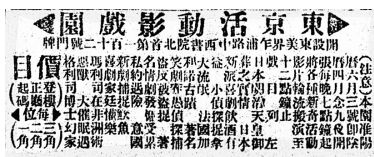
この時期は、活動影戲（映画）は、何を上映するか告知されることはほとんどなかった。ただ、「活動影戲」とだけ広告され、何が放映されるのかは、おそらく行ってみないと分からない状態だったのだろう。逆にいえば、この頃の映画には作品性は乏しかったこともあり、「活動影

劇」とだけ示せばそれで良かったともいえよう。

これが大きく進展するのが、1913年だ。同年5月に虹口活動影戲園を引き継いだ東京活動影戲園が、新装開業を知らせるとともに、次の3点で大きな刷新を行った。



(図像1) 1913年5月24日付刷新告知



(図像2) 6月3日付番組告知広告<sup>2</sup>

第1に、毎日新聞紙上に広告を掲げ、その当日何を放映するか演目を告知したこと。

第2に、映画だけで番組を組み、その他のアトラクションを混ぜる興行方式を廃止したこと。

第3に、毎週2回フィルムを入れ替え（火曜日と金曜日）、定期的にフィルムを交換したこと。

これによって、上海の映画は、ようやく近代的映画放映興行の道を歩むことになっていった<sup>3</sup>。常設映画館の誕生から5年を経て、いわば映

2 いずれも『申報』掲載広告。図像1の5月24日の告知広告では、同月25日から開幕すること「每晚6時より12時まで各種新式フィルムを順繰りに上演する」「放映時間の長さ、観覧料の廉価さは、お客様のお心にかなうものにて広くご披露する次第。室内の広さ、座席の清潔さ、おもてなしの心配り、フィルムの珍しさ、いずれも他園とは比べものにならぬほど」と告げるのみだが、図像2の10日後の6月3日広告では、『日本明治天皇御葬之實情』（明治天皇大葬）、『日本新派喜劇飲酒有益』（「酒屋の場」M. パター商会撮影）、『小偵探捉拿大流氓』（小探偵大悪党を捉える）等、具体的に放映する作品名10本を列記している。6時から12時までの6時間の興行に対して10本のみでは間が埋まらないはずだが（当時のフィルムは1巻が10分足らず）、このための措置として「輪流搬演」（順繰り＝繰り返し）上演する策を採ったと考えられる。

3 これらの事情の詳細については、拙著『銀幕發光—中国の映画伝来と上海放映興行の展開』（作品社、2019年）第1章～第3章を参照されたい。

画館らしい姿を調べ始めたといえるだろう。そして、この広告から、何が放映されたのかを実証する手がかりが得られることになる。

再び東京活動影戲園の広告に眼を向けると、従来中国映画史研究の視野からこぼれ落ちていた作品の放映が浮かび上がる。それは、イタリア長篇歴史大作だ。

**園戲影動活京東**  
 牌門號二百一第首北院書西中路浦乍昇美在設開

**目價** 勿請後於空長兼備台存機聖至怒見至由過  
 起正並 失一將本而約以狀是他人數大野字第第仙海  
 碼應機 典觀紙月報五及一門整大數免後免九一人日地耶意  
**位每** 標以演除後下滿見園余山勝生受魂重重引勝府樹園  
 一二三 爲樂四歷之除台令等河曾各頭刑生地起人夢耶君大  
 角角角 幸服後廿影尺鬼人魂望山免馬如前獄羅地中君談名  
 并連六片爲景心之部血魂而獄爲止遊府偶一遊士

**注意**

**園戲影動活京東**  
 牌門號二百一第首北院書西中路浦乍昇美在設開

**目價** 勿請後於空長兼備台存機聖至怒見至由過  
 起正並 失一將本而約以狀是他人數大野字第第仙海  
 碼應機 典觀紙月報五及一門整大數免後免九一人日地耶意  
**位每** 標以演除後下滿見園余山勝生受魂重重引勝府樹園  
 一二三 爲樂四歷之除台令等河曾各頭刑生地起人夢耶君大  
 角角角 幸服後廿影尺鬼人魂望山免馬如前獄羅地中君談名  
 并連六片爲景心之部血魂而獄爲止遊府偶一遊士

**注意**

(図像3) 『申報』1913年7月29日広告

(図像4) 同12月1日広告

図像3の7月29日広告では、題名というよりは内容梗概的な告知だが「意國大名士鄧德君夢遊地府」との記載から、これがダンテの『神曲』の中の「地獄篇」の映画化であることが判明する。図像4の方も、題名として固定化されておらず内容梗概であるが、「羅馬教皇」「害盡耶蘇教人命軍官放火燒燬羅馬全城」（キリスト教徒を迫害しローマ全市に火を放った）等の記載から、これがローマ皇帝ネロの暴虐ぶりを描いたシェンケヴィチの『クオ・ヴァディス』の映画化作品であることが了解できる。いずれも、当時のイタリア長篇歴史大作を代表する作品で、後述するとおり、日本で先に上映され好評を博した作品だった。この2作では、まだ定着した題名、つまり訳題を表示するにいたっていないが、それでも外国映画を将来する上で必須の内容紹介を与えているといえるだろう。



(図像5) ミラノフィルム製『地獄篇』 (図像6) チネス製『クォ・ヴァディス』

この興行スタイルは、ほどなくして全上海市内の活動影戲園（院）に広がり、2年後の1915年頃には全ての映画館がこれを踏襲するにいたり、ここからこの時期どこのどの映画が放映されたかを究明する筋道が得られるようになる。

この上映広告を丹念に追うと、フランス他のコメディから上掲のようなイタリア長篇歴史大作、そしてジゴマ（Zigomar）を濫觴とする犯罪探偵劇が上海のスクリーンを占めていたことが確認できる。

例えば、フランスコメディでいえば、パテ社のマックス・ランデ（Max Linder）を始め、ゴーモン社のベベ（Bébé）シリーズ、そしてエクレール社のゴントラン（Gontran）シリーズが各館で競うように上映されていった。また、フランスばかりでなくイタリアコメディでも、パステリ社のポリドー（Polidor）やチネス社の売り物のトントリーニ（Tontolini）もアンブロジーオ社のキャラクターであるロビネット（Robinet；地域によりファブレ Marcel Fabre と称した）等が、必ずどこかの映画館で上映されるのが常であった。

このコメディ隆盛に対し、イタリア長篇歴史大作の登場で、世界の映画界が度肝を抜かれた一方、すべてが一挙に長篇化へ向かうわけではなく、フランスではジゴマ（Zigomar）やファントマ（Fantômas）

のような3-5巻ものをシリーズ化して続ける犯罪探偵劇を生み出すにいたる。

この間の事情を、ジョルジュ・サドゥールは、次のように叙述する。

「イタリアにおける偉大な喜劇役者はフランス人（アンドレ・デード、マルセル・ファール、フェルディナン・ギョーム）であった。この一派はイタラ社やアンブロジーオ社やチネス社にとっては優れた売物であったが、大して独創性を持っていなかったようだし、フランス喜劇を質的に越えたものではなかった。これに対して文芸シリーズの領域では、フランスはあつという間にイタリアに追い越されてしまった。

このジャンルにおけるイタリア最初の大成功作は一九〇八年の『ポンペイ最後の日』であった。製作はアンブロジーオ、演出はルイジ・マッジ、出演はリディア・ディ・ロベルティとミルラ・プリンチーピであった。この作品の撮影をしたロベルト・オメーニャは、その中でトリック撮影を行なった。このことはこの映画の世界的大成功を保証し、到るところで傑作と呼ばれる結果になった。」<sup>4</sup>

またこれは、世界中に波及し、極東の地である上海に近接する日本においても、同様の動きが見られた。田中純一郎は、以下のとおり記している。

「明治時代から活潑だったヨーロッパ映画の輸入が、第一次世界大戦勃発頃までは、加速度的にその数を増した。ことに、知名な文芸作品を映画化した、フランスやドイツの文芸映画、イタリアの史劇ものなどが歓迎され、なかでも、壮大華麗なセットや、大群衆を登場させて撮影したイタリア史劇映画は、至るところで日本の見物を驚嘆させた。日本の映画業者は、乏しい財布から資金を出して、出来そこないの活動写真を作

---

<sup>4</sup> ジョルジュ・サドゥール『世界映画全史』第6巻、日本語版（村山匡一郎・出口丈人・小松弘訳、国書刊行会、1993年刊）p.153。

るよりは、眼もあやな素晴らしい規模をもつ外国映画を買い入れる方に、採算上の安全性が高いというので、自社映画は二次的となり、興行映画の七〇パーセント以上を、輸入映画でまかなうという現象を呈した。』<sup>5</sup>

ところが、時あたかも第一次世界大戦がバルカン半島で勃発し、クリスマスまでには決着するだろうとの大方の予想に反して戦争は長期化、国家総力戦の様相を呈して、1914年夏以降、映画制作は大きな制約を受けて停滞を余儀なくされてしまう。フランスコメディの大立て者マックス・ランデが同年8月の撮影を最後に従軍するだけでなく、パテ社のフィルム工場も軍需工場に徴発されてしまうほどだったという<sup>6</sup>。

この余波は、日本では非常に顕著で、当時の様子を田中純一郎は次のように記している。

「この年<1914年>、第一次世界大戦がはじまると、それまで全盛を誇ったヨーロッパの映画界は、たちまち火の消えたような寂しさになり、横浜の貿易商に到着する新映画は激減し、今まで外国映画を専門に興行していた浅草のキリン館、朝日館、御国座等は、八月中旬からついに休業の状態に入った。」<sup>7</sup>

サラエボでオーストリア皇太子が暗殺されたのが6月28日、その後オーストリア・ハンガリー帝国がセルビアに宣戦布告して世界戦争の戦端が開かれたのがその1ヶ月後の7月25日なので、その波紋は驚くべき速さで世界中に伝わったといえる。

ところが、隣国中国の上海では、日本ほど極端なフィルム不足は、目立つ形では現れていなかった。第一次世界大戦開戦にともない、フランスで「映画製作は一夜のうちに完全に中断してしまった」としても、日

5 田中純一郎『日本映画発達史』（中央公論社、1975年中公文庫版）第1巻 pp.246-247。

6 ジョルジュ・サドゥール『世界映画全史』第7巻「2. フランス映画の衰退 1914-1919」p.43。

7 『日本映画発達史』第1巻 pp.252-253。



本で「たちまち火の消えたような寂しさになり、横浜の貿易商に到着する新映画は激減」しても、上海の映画興行は依然続けられていたのである。

たとえば、当時上海随一の高級映画館といえる夏令配克影戲院が開幕したのは1914年の9月8日で、ちょうど第一次大戦が勃発した直後だったし、そこでこけら落としに放映された作品は、伊アンブロジーオ社製『何等英雄 *Napoleon, epepea napoleonica*』（『ナポレオン一代記』）だった。また、これに続いて開業した大陸活動影戲院の開幕も、1914年9月4日だった。しかも、定期的にフィルム入替えを行い、開幕翌週の9月8日からは仏パテ社製の『ニック・ウィンターの夢 *Le songe de Nick Winter*』や伊アンブロジーオ社製『ロビネットと魔法の杖 *Astuzia di Robinet*』を放映するなど、依然として仏伊の作品が中心を占めていた。不定期に映画上映会を開催していた中国青年会（キリスト教青年会）も、伊サヴォイア社製『ジャンヌ・ダルク *Giovanna d'Arco*』を同年5月25日に『巾幗英雄』と題し、10月30日には『法蘭西戦事聲中之女豪傑』と題して放映しているほどで、欧洲映画の牙城は揺るぎないものに見えていた。

また、エクレール社のジゴマの成功を承けてゴーモン社がルイ・フィヤードに撮らせた『ファントマ *Fantômas*』シリーズは、ルネ・ナヴァール（René Navarre / ファントマ）とエドモンド・ブレオン（Edmund Breon / ジューヴ警部）の主演で1913年に第1作が出品されたが、上海ではその翌年の1914年5月に公開されている<sup>8</sup>。第一次世界大戦が勃発する直前の滑り込みのようだが、その後1916年7月まで、つまり大戦の最中でも『ファントマ』は断続的に上映が行われている。

<sup>8</sup> 『申報』1914（民国三）年5月15日の東京活動影戲園の上映広告に見える。ただし、この際の題名は『靈魂盜黨偵探奇案』と表示され、これはおそらく「Fantômas」を「phantom」と誤認した結果と思われる。その後5月29日に中国青年会で上映された際に「方得陸案」と音訳されて以降、「販擋未司」（1914年11月東京活動影戲園）、「方東買司」（1915年3月虹口活動影戲園）、「方登馬司」（1916年3月海蟹樓活動影戲園）、「方登馬士」（1916年7月法蘭西影戲院）と、当て字は変遷するがいずれも音訳で表示されるようになる。



(図像7) ファントマ1



(図像8) ファントマ2



(図像9) ファントマ3

大戦の余波は、しかし数ヶ月する中に徐々に現れ始めた。年を跨ぎ1915年に入ると、それは、上映フィルム本数の枯渇としてではなく、フィルムの供給元がアメリカへとシフトする形で現れ始めたのだ。世界の映画放映事情としても、探偵犯罪もの（フランス製）から連続活劇（アメリカ製）への移行がちょうど1913年から14年にかけてであり、アメリカに渡ったフランス映画人が活躍の場を得るとともに、新興アメリカ映画が世界に進出する機会を窺っていた時期であった。映画のもう一方の大きなジャンルであったコメディ作品においても、その移行は徐々に現れていた。

### 3. フランス、イタリアからアメリカへ

上海で最も早くアメリカ製コメディが放映された記録は、私の調査の限りでは、1914年11月末の東京活動影戲園で放映された『レベッカの結婚式 *Rebecca's Wedding Day*（中国語題：李別克氏之結婚日）』である。続いて『愛情とガソリン *Love and Gasoline*（中国語題：愛情與汽油）』が同じく東京活動影戲園で、年明けの2月初めに放映されている。『レベッカの結婚式』は、“Fatty” ロスコウ・アーバックル主演で、『愛情とガソリン』はメイベル・ノーマン主演のキーストン社製コメディである。これに継いでチャールズ・チャップリンの『恋の20分間 *Twenty Minutes of Love*（中国語題：二十分鐘之愛情）』が、これも東京活動影戲

園で3月始めに上映されている<sup>9</sup>。『恋の20分間』はチャップリンのキーストン社時代の初期の作品だ。いずれもキーストン社で1914年に撮影された新作で、まだそれぞれのキャラクターの記名性は高くなく、ただ作品名のみが告知される形の広告だったが、アメリカ製コメディが上海に着実に一步を踏み入れた足跡を認めることができる。

こうして、上海では1915年の初夏までは欧洲製コメディの放映が残ったものの、その後はすっかり影を潜めてしまう。その間隙を縫うように市場に参入したのが、アメリカ製コメディだったことは、世界映画の放映事情と連動しているといえる。初めはキーストンを先陣として、上記のとおり1914年末頃から翌1915年春頃までに上海に着々と進出を果たしていた。第一次世界大戦開戦が必ずしも截然たる分け目とはならないが、しかしマックス・ランデのように従軍により撮影が停頓したフランス製コメディに対し、新興アメリカ製コメディがその隙間を埋める形で浸食したことでは、第一次世界大戦がもたらした転機であることに違いはない。

こうして上海映画興行の世界には、第一次世界大戦開戦後1年ほどで、そのフィルムの供給源が、イタリア、フランスからアメリカへと移行する大転換がもたらされた。そこから、放映されるフィルム自体にも大きな転換が生じ、イタリア長篇歴史文芸作品のような長大作は影を潜め、フランス製探偵犯罪ものはアメリカ製連続活劇へ、コメディもマックス・ランデやトントリーニ等の欧洲製コメディからロスコー・ファッティ・アーバックル、メイベル・ノーマン、チャールズ・チャップリンが活躍するキーストン製コメディへと置き換えられていった。

---

<sup>9</sup> それぞれ『申報』1914（民国三）年11月24日、同1915（民国四）年2月9日、同1915（民国四）年3月5日に上映広告が見える。



(図像10) 恋の20分間 1 (図像11) 恋の20分間 2 (図像12) 恋の20分間 3

この中、ファントマのようなフランス製探偵犯罪もののアメリカ的展開として、連続活劇が大きな役割を演ずる。ジョルジュ・サドゥールは、この間の事情を『世界映画全史』で次のように記述する。

「一九一三年から一九一四年にかけてフイヤードはこのシリーズ(『ファントマ』)の五つのエピソードを映画化した。それは『ファントマ第一篇ベルタム事件』、……<中略>……『ファントマ第五篇偽りの長官』である。パテ社は無力ながらジョルジュ・ドゥノラに委託してこのシリーズに対抗し、「ロカンボール」の現代版を作った。一九一四年の第一次世界大戦の宣戦によって『ファントマ』のシリーズは中止され、しばらくして連続映画はアメリカで流行の蘇生をみせ、出版物と結合して<連続活劇(シリアル)>に変身した。」<sup>10</sup>

連続活劇は、アクションを主軸に据えた短篇映画で、10分-20分ほどのエピソードを毎週1本ずつ公開し、多くは15話で完結した。主人公に女性が据えられることが多く、盗賊や未開世界の原住民に囚われたり財産を横取りしようと企む悪人の罠に嵌まったりの危難に遭遇する。これをヒロインの恋人が救出したりヒロイン自身が格闘する展開で、毎回の末尾に最大の危機を迎え、さてこの後どうなるものやと観客の気を引いてエピソードを終わらせ、次のエピソードに繋ぐ方式を採った。こ

<sup>10</sup> 『世界映画全史』第6巻「17. 連続映画の殺人 1908-1915」pp.245-246。

のため、クリフ・ハンガー（崖っぷちの宙づり）とも称される。さらには、主人公が女性である点に、新大陸アメリカの面目躍如たる点があり、多くはスタントなしで女優が危険な場面を自ら演じる点も大きな特色だった。また、新聞の連載小説とシンクロさせ、文字と映像の複数のルートから観客を掴み、さらに危機また危機の連続で観客を煽り、後の展開を知りたくなる心理に乗じて次々とエピソードを繋ぐため、映画館としては固定客が確実に見込める有望な映画ジャンルであった。その起源は、1912年のエジソン社による『メアリーに何が起こったのか *What Happened to Mary*』に始まるともいわれるが、上掲のジョルジュ・サドゥールのように、フランス映画『ファントマ』（1913年）の流れを汲み、これがアメリカに遷移して盛んに製作されたともみなされる。

世界の映画市場が、こうしたアメリカ製の連続活劇（serial）に移行してゆく中、上海の映画興行界でも、まさにこの切替えが行われていた。『ファントマ』放映が途切れた1915年5月、虹口活動影戲園<sup>11</sup>で『秘密女子 *Lucille Love, Girl of Mystery*』<sup>12</sup>が公開された<sup>13</sup>。これが、上海の映画館におけるアメリカ製連続活劇が全話揃った完全版として放映された最初の作品とあってよいだろう<sup>14</sup>。そしてこれにすぐ続いて、同6月に中国林登影戲会社が謀得利劇場（Moutrie 外灘と南京路に面する謀得利琴行〈ピアノ店〉の2階／元は劇場、コンサートホール）で新たな映画興行

<sup>11</sup> 1915年3月23日から、東京活動影戲園は、再び旧来の名称である虹口活動影戲園に復していた（『申報』1915（民国四）年3月23日付広告による）。

<sup>12</sup> ユニバーサルフィルム、1914年製。全15話、フランシス・フォード監督、グレイス・キューナード主演。

<sup>13</sup> 『申報』1915（民国四）年5月14日付広告。

<sup>14</sup> これより1年前の1914年5月26日から東京活動影戲園で『叔父謀産設計陷害少女遭難禍中得福』と題する12話の連続ものが放映されているが（『申報』5月26日付広告）、この題名から推測するに『ポーリンの危難 *The Perils of Pauline*』（パテ、1914年製、全20話）である可能性もあるが、エピソード数が一致しないので、あるいは全巻揃わぬ形で放映された可能性も排除できない。もしそうだとすると『秘密女子』が上海で最初に完全版として放映された連続活劇であることに変わりはない。

を始め、連続活劇の先駆といわれる『カスリーンの冒険 *The Adventures of Kathlyn*』<sup>15</sup>を放映した。その開幕予告で、次のとおり紹介する。

「中国林発公司予告 南京路謀得利外国劇場跡に開設 本社は完全に中国人により組織されたもの。特に海外より各種新式躍動フィルムを取り寄せ、連日入替放映。上海ご婦人紳士方に見聞を広める機会をご提供。しかも、このフィルムはこれまで未公開のもの。海外でも滅多に眼にできぬもの。あらゆる事実が人の感興を惹き、人の心を開き、通常のものとはまったく異なる類。6月16日に開幕と決定。各界皆さまこの特色をご観覧いただきたく格別のおもてなしでお迎えいたします。開演時刻：毎晩9時15分。料金：1等1元2等7角3等5角。初日は、美女危急を脱するの一話を上映。このフィルムは長さ27,000フィートに達し、米国女性カスリーン女史が土人に捉えられ、何とかそこから脱出。数々の艱難の中、野獣や猛虎の中から命からがら逃げ出す情景は真に迫り、まことに見応えあるもの。」<sup>16</sup>

かくして上海にもアメリカ製連続活劇放映の機運がもたらされ、この後5、6年にわたって連続活劇放映隆盛の時代を迎えることになる。

#### 4. 上海が先か東京が先か

以上に整理概観したように、第一次世界大戦を挟んで、上海ではフランスイタリアの欧洲製映画からアメリカ製映画に、そのリソースが大きく転換したが、こうした外国映画放映事業を、同じく極東に位置する日本での放映事情と対照してみると、そこに小さくない差異を見出すことができる。それは、上海と東京とどちらが先に放映されたかであり、そ

<sup>15</sup> セリグ・ボリスコープ、1913年製。全13話、フランシス・グランドン監督、キャスリン・ウィリアムズ主演。

<sup>16</sup> 『申報』1915（民国四）年6月16日。

の輸入導入する際の現地語への題名の翻訳のあり方だ。

先のイタリア長篇歴史大作に戻って見ると、その放映時期には明白な法則が見られる。第一次世界大戦勃発前のイタリア映画全盛の時期でもあったが、まず先にこれを採り入れ、スクリーンに輝きを添えたのは、日本であった。先に引用した田中純一郎が「イタリアの史劇ものなどが歓迎され、なかでも、壮大華麗なセットや、大群衆を登場させて撮影したイタリア史劇映画は、至るところで日本の見物を驚嘆させた」<sup>17</sup>と述べるように、先ずもって日本で大いに受け容れられた。そしてそれが、ほどなくして上海でも上映されるという図式が浮かび上がる。これを表にしてみると、以下のとおりだ。

イタリア長篇歴史映画の上映期日対照

作品	日本上映 <sup>18</sup>		上海上映	
	期日	映画館	期日	影戲院
クォ・ヴァーデイス	1913.10.21	東京帝國劇場	1913.12.1-12.4	東京活動影戲園
ポンペイ最後の日	1914.1.3	東京帝國劇場	1914.3.13-3.16	東京活動影戲園
アントニーとクレオパトラ	1914.3.22	東京常盤座	1914.6.28-7.4	東京活動影戲園
ナポレオン一代記	1914.3.22	東京常盤座	1914.9.8-9.14	夏令配克影戲院
ジャンヌ・ダルク	1915.1.15	東京帝國劇場	1914.5.29-5.30/ 10.31-11.3	中国青年会

ほぼ2ヵ月から3ヵ月の時を経て、東京で人気を博した作品が上海で興行されており、この時期の日本での外国映画（洋画）放映の事情が、上海に伝播する様子が見られるだろう。ただ、ここで見過ごしてはならないのは、日本で好評を博した映画作品がそっくりすべて上海に持ち込

<sup>17</sup> 注5に同じ。

<sup>18</sup> 日本での初演時期及び劇場は、いずれも『日本映画発達史』第1巻 pp.249-251による。

まれた訳ではないことだ。たとえば、イタリア長篇歴史大作ではないが『プラーグの大学生 *Der Student von Prag*』（ドイツビオスコープ社1913年製）等は、日本では相当の人気作品となったものの、上海に持ち込まれた形跡は見出せない。また、先にも触れたとおり『ジャンヌ・ダルク』は、イタリアサヴォイア社1913年の出品だが、これは上海の方が先んじていて、その題名は『巾幗英雄』との極めて中国的な意識的題名が与えられていた（2回目には『法蘭西戦争聲中之女豪傑』と改題）。『巾幗』は、頭巾の意味でこれを被った英雄ということで女性英傑を指すからだ。こうした上海と日本での作品導入の先後関係については、後に再度検討するが、この時期これらの作品が東京活動影戲園を主たる放映館として上映されたことも忘れてはならない。おそらく日本人が支配人を務めていたことと深く関わるだろうからだ。

『ナポレオン一代記』は、夏令配克影戲院の開幕こけら落とし作品で、当時「全巻5巻で8,000フィート。フランス、ナポレオンの戦争史実を描くもの。光量鮮明にして珍しき場面が次々止まることなく現れる。歐洲映画学大家の手で露天撮影式にて撮影されたもの。本院主人は巨資を惜しまず2万ポンドをつぎ込んで購入」<sup>19</sup>と高らかに宣伝を打っていたものだが、リソースは案外手近な日本から調達したのか、とも疑える。少なくとも、日本での人気の具合<sup>20</sup>を勘案したことは想像に難くない。

これに対して、コメディの方は、必ずしもすべての放映作品に題名が表示されるとは限らず、「笑片」とか「趣劇」とかしか表示されないことも多く、特定し対照することを難しくしている。また、『ファントマ』では、5作ある中のどの篇なのか、これも題名表示が曖昧なところがあ

<sup>19</sup> 『申報』1914（民国三）年9月8日付広告。

<sup>20</sup> 『日本映画発達史』で、田中純一郎は「ナポレオン役者カルロ・カンボガリアーニの主演で作った舞台劇的映画。思いでの場面に二重焼きを用いて珍しがられた」と記している（同書第1巻、pp.250-251）。



り、注8に記したとおり、「ファントマ」であることは判別できるものの、その篇を特定することができにくい。たとえば、以下のような表示なのだ。

1. 靈魂盜黨偵探奇案（東京活動影戲園 1914年5月15日—22日）
2. 方得陸案（中国青年會 1914年5月29日、30日）
3. 同上（同上 1914年11月4日、5日）
4. 販擋末司五次脱逃靈魂盜黨偵探奇案（東京活動影戲園 1914年11月6日—9日）
5. 方東買司偵探奇案（虹口活動影戲園 1915年3月23日—25日）
6. 法国劫珠大盜方登馬司（海蜃樓活動影戲園 1916年3月17日—23日）
7. 法国大盜方登馬士（法蘭西影戲院 1916年7月4日—6日）

4の「販擋末司五次脱逃靈魂盜黨偵探奇案」だけが、内容をやや連想させるのみだ。

これに対して、日本では1915年5月9日を皮切りに浅草電気館で次々公開<sup>21</sup>されていった際には、『ファントマ・ベルタム事件』『ファントマ・不思議な指紋』『ファントマ・黒衣の人』『ファントマ・仮面の舞踏会』『ファントマ・偽りの長官』と、それぞれの篇が明らかに表示されていた。

こうしたコメディや探偵犯罪ものに比べ、アメリカ製連続活劇は、その題名表示が明らか（注14に記した『叔父謀産設計陷害少女遭難禍中得福』を除いて）で、原作の特定も容易い。ただし、同じ連続活劇でありながら、その放映時期は日中で前後することが多く、あるいは取捨選択も異なり、上海で放映された作品が日本では上映されないといった相違を見せることも珍しくない。この時期の先後や取捨選択の差異があるのにはそれぞれ理由があるはずで、それゆえにこれを対照する意味も生ま

---

<sup>21</sup> 『日本映画発達史』第1巻 p.254による。

れるともいえる。

たとえば、日本では『マスター・キー *The Master Key*』がどの連続活劇よりも先行して先陣を切る形となったが、一方の上海では、『ルシル・ラブ *Lucille Love, Girl of Mystery*』が、前述のとおり『秘密女子』の題名で1915年5月に公開されているが、日本ではこれに遅れること1年数ヶ月、1916年7月になってようやく放映されている（日本初公開時の題名は『國寶』）。原題は、『*Lucille Love, Girl of Mystery*』で、前半のルシル・ラブは主人公の女性の名前なので、これを『秘密女子』と訳して題名とするのは、非常に単純な命名法ではある。対して、日本での『國寶』という命名は、ウェストポイント士官学校で友人同士だったサンプター・ラブとヒューゴが、ある事件でサンプターが目撃者となってヒューゴが学校を放校され、その後スパイとなり、サンプターが娘のルシルに託した防衛計画を巡って彼女を陥れる奸計を巡らす、そのストーリーに即した題名である。

また、日本での連続活劇の先陣を飾った『マスター・キー *The Master Key*』だが、上海ではこれが鉞山を巡る争奪戦のため『開鑛之總鑰（開鑛鑰匙）』と、ただのマスター・キーではなく内容を補足する形の題名を与えているが、日本公開の5ヵ月ほど後（1916年2月15日）に公開されており、もはや連続活劇としては先陣でも何でもなく、数ある連続活劇作品の中の1作にすぎない位置だった。どちらも米ユニバーサル社の作品だが、一方では『マスター・キー』が優先され大入りを取り、一方では『秘密女子（ルシル・ラブ）』が優先された格好となった。

さらに、日本ではこの『マスター・キー』に続いて『名金 *The Broken Coin*』が1915年10月に公開され、二の矢として連続活劇の人気を確立する役割を果たすが、実はこの『名金』は『ルシル・ラブ』で人気を獲得したフランシス・フォード（シナリオ／監督／出演）と主演のグレー

ス・キュナードのコンビによる作品で、出演者もほとんどそのまま登用されており、いわば続編のような形ながら、日本では続編の方が先行し、これに続いて前編の『ルシル・ラブ』が公開された格好だ。これに対して上海では、『半文銭』とほぼ原題をそのまま訳したような題名で公開されたが、これは1916年7月7日のことであり、日本に遅れること8ヶ月ほどしてからになる。この『半文銭／名金』は、財宝の在処の鍵となるラテン語が刻まれたコインの半分を手に入れたレポーターのキティ・グレイが、もう片方を保有する一味に狙われ財宝争奪に巻き込まれる話で、コインの片方がそれぞれストーリーを推進する役目を担っている。

同じ作品がところ変わると異なる題名になるが、これらの対照に入る前に、こうして上海での放映事業に定着していった連続活劇の特徴を見ておくことにする。上海の映画放映興行の一斑が見えてくるからだ。

## 5. 上海での連続活劇放映の特徴

ここで見るのは、日本では『マスター・キー』『名金』の影に隠れてあまり注目されなかった感があるのに対し、上海で最も人気があった連続活劇の『ポーリンの危難 *The Perils of Pauline*』（パテ、1914年製）の興行スケジュールだ。

この連続活劇は、『ルシル・ラブ』より先に撮影された作品で、『ポーリンの危難』の成功に刺激されたユニバーサルが、元々は2巻もの程度であったところ、急遽企画を膨らませて連続活劇に仕立てた経緯がある。ストーリーは、大富豪の叔父が急死し、その莫大な遺産がポーリンに継承されることになるが、それを横取りしようとする執事の悪だくみによって、気球に取り残されたりネイティブアメリカンに崖から落とされたりとさんざん危険な目に遭うが、その都度恋人が助けて難を逃れるという典型的なクリフ・ハンガーだ。この遺産から惹き起こされる危難

のため、日本では、後掲の一覧のとおり当初は『遺産』と題されていた。

この『ポーリンの危難』が、上海では『寶蓮遇(歴)險記』と命名されて、次のスケジュールで放映された。「寶蓮」は Pauline の音訳で、それに冒険や危難に見舞われる物語にしばしば付与される「遇(歴)險記」が付加され、中国的にオーソドックスな題名が与えられたといえる。

時は1916年、映画館は愛倫活動影戲園だ。

- 5月5日(金)―8日(月) 第1集、第2集
- 5月9日(火)―11日(木) 別番組
- 5月12日(金)―15日(月) 第3集、第4集
- 5月16日(火)―18日(木) 別番組
- 5月19日(金)―22日(月) 第5集、第6集
- 5月23日(火)―25日(木) 別番組
- 5月26日(金)―29日(月) 第7集、第8集
- 5月30日(火)―6月1日(木) 別番組
- 6月2日(金)―5日(月) 第9集、第10集
- 6月6日(火)―8日(木) 別番組
- 6月9日(金)―12日(月) 第11集、第12集
- 6月13日(火)―15日(木) 別番組
- 6月16日(金)―19日(月) 第13集、第14集
- 6月20日(火)―22日(木) 別番組
- 6月23日(金)―26日(月) 第15集、第16集
- 6月27日(火)―29日(木) 別番組
- 6月30日(金)―7月6日(木) 第17集、第18集
- 7月7日(金)―10日(月) 別番組
- 7月11日(火)―13日(木) 別番組(プロテア)放映
- 7月14日(金)―18日(火) 第19集、第20集 39-42巻放映完了

各集2巻ずつで全20集40巻のはずだが、ここでの放映は42巻としている。原産国のアメリカでは、毎週1集2巻ずつ上映し、15週なり20週で完結するのだが、上海での連続活劇放映は、毎回2集4巻ずつ放映するスタイルを採っていた。また、先に見たとおり、1913年5月に東京活動影戲園が刷新した放映方式がすでに上海の各館に定着しており、毎週火曜日と金曜日にフィルムを入替える方式を採用していたため、1週間に4集8巻ずつ放映してゆくと、本来であれば5週間で放映が終わってしまうところだ。ところが、それではせっかくの舶来映画で観客を惹き続ける時間が続かずもったいないと考えたのか、あるいはフィルムの調達の問題なのか、毎週の最も観客を呼べる金、土、日、月の枠に連続活劇を入れ込み、火、水、木の枠には別番組を充てて、いわば細く長く同一の連続活劇を放映し続けることで観客の引き留めを図ったのだろう。放映開始日の新聞広告でも、このスケジュールを次のように告知している。

「今晚から、天下無双の連続大型劇、他に比肩しうるなき恋愛活劇の第1集第2集、第1巻2巻3巻4巻5巻6巻の『寶蓮遇險記』を特に上映。これは、全20集42巻で、かつて25,000米ドルの賞を受けた作品。今晚より第1集第2集を皮切りに、引き続き毎週金曜日ごと順繰りに放映。大型映画ご愛好のお客様は急ぎご来観ください。お知らせまで」<sup>22</sup>

6月30日（金）から7月6日（木）にかけて、第17集第18集のところがイレギュラーになっているが、それでも毎週金曜日から放映するスケジュールは守られている。この放映方式は、その後連続活劇が増加し、各映画館で競うように放映が行われるようになると、複数の連続活劇を同時並行で放映するまでにいたる。つまり、上記の放映日程の別番組のところ、他の連続活劇か別作品が差し込まれる形だ。上掲のスケ

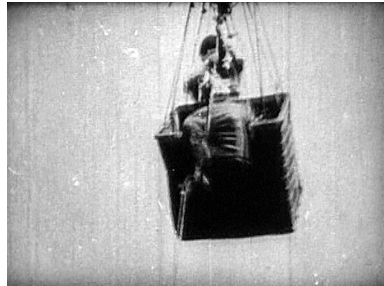
<sup>22</sup> 『申報』1916（民国五）年5月5日付広告。

ジュールで7月11日から13日のところに嵌められた『プロテア』（1913年）も、1911年の『ジゴマ』上中下3篇に続いて同じくエクレール社がヴィクトラン・ジャッセに撮影させたもので、体にぴったりとした黒タイツを着た女盗賊プロテアが機密書類を盗み出し、貴婦人・ジプシーなどに変装して逃亡する3作からなるフランス製連作ものである。

また、1917年5月に初の中国人経営者による上海大戲院が開業すると、愛倫活動影戲園はその系列下に入ることとなり、上海大戲院を上流として先行上映を行い、その数日後から1週間くらい間を空けて下流の愛倫が後を追うように放映を始め、ちょうど歌曲の「輪唱」のように2館が追いかけながら同一の作品放映を続ける例も出てくる。上海大戲院と愛倫活動影戲院とは、上海内でも比較的離れた場所（上海は四川北路と虬江路角で愛倫は海寧路と江西北路角）に位置するため、近接した時期に同一篇を放映しても営業的に支障はなかったのだろう。むしろ観客からすれば、上海大戲院である集を見逃したとしても、その集は愛倫でフォローすることも可能で、利点がないわけではなかっただろう。



(図像13) ポーリンの危難1



(図像14) ポーリンの危難2

『ポーリンの危難』は、これ以降上海では大人気を博し、主演の Pearl White のことを寶蓮 = ポーリンと呼称するまでになっていった。

パール・ホワイトのその後の連続活劇作品ではもちろんのこと、彼女が主演するフィーチャー・フィルム（1本で上映時間の大半を占められる長篇作品）であっても決まって「寶蓮女士傑作」と謳われるようになる<sup>23</sup>。しかも、『ポーリンの危難』自体も、映画館を換えて何度も再映されるほどで、それは1920年代にまで渡り1924年頃まで維持されるほどだった<sup>24</sup>。こうした人気の度合いが、上海では極めて高い作品がある一方、同じ上海でも日本で絶賛を受けた作品が、それほど評判を取れないこともある。またこの反対で、上海ではこの『ポーリンの危難』のように息長い人気を維持した作品が、日本ではそれほどでもないなど、日中の連続活劇の受け容れ具合については、興味深い差異が生じている。甚だしい例では、上海で人気を博しながら、日本では公開さえされていないものまであるほどだ。

## 6. 連続活劇における上海と東京の放映先後

1910年代半ば、連続活劇が大人気となり、次から次へと上海にも持ち込まれるが、この時ほぼ同時期に併行する形で日本でも連続活劇は隆盛を極めていった。前掲の『日本映画発達史』では、次のようにその事情を記している。

「アメリカ連続活劇は『マスター・キー』の輸入にはじまり、『名金』は最も評判高く、日本でも翻訳出版されたほどであった。これにつづいては、『カスリンの冒険』『黒い箱』『拳骨』『百萬弗の秘密』『国宝』『獣

<sup>23</sup> たとえば『申報』1924（民国一三）年2月20日付の上映広告によれば、同年2月21日から26日まで法國大影戲院での上映が予告される『荒山俠女 *The Mountain Woman*（1921）』にも「寶蓮女士最新傑作」の意が見える。

<sup>24</sup> 1924（民国一三）年1月10日から、共和影戲院で『寶蓮遇險記』の5集6集を10日－11日に、7集8集を12日－13日に上映する旨の広告が『申報』同年1月11日に見える。共和影戲院は、中国人街の二番館三番館レベルの映画館ではあるが、初演から7、8年経ってもなお客が呼べる人気作品であったことが窺える。

魂』『ポーリン』『快漢口ロー』『金剛星』『赤輪』『紫の覆面』『護る影』『鉄の爪』『電話の声』『潜航艇の秘密』『灰色の幽霊』等が知られ、大正七<1918>年頃まで盛んに流行した。どこの映画館でも、そのプログラムの一部には、必ず連続活劇の第何篇かが加えられてあった。」<sup>25</sup>

ただ同じ時期、近隣の上海と日本であっても、その受け入れ作品やその人気の度合いには、少なからぬ差異が生じている。上海と日本での連続活劇放映作品とその公開時期を一覧にまとめると以下のとおりだ。

上海・日本連続活劇封切り時期対照（題名後の数字は公開初日）

年月	上海	日本 <sup>26</sup>
1915年5月	秘密女子 Lucille Love, Girl of Mystery 5/14	
1915年6月	柯絲倫遇險記（凱世倫女士） The Adventures of Kathlyn 6/16	
1915年7月	雙美復仇記（又名三心牌／ 三心牌雙美報仇記） The Trey o' Hearts 7/02	
1915年9月		マスター・キー The Master Key
1915年10月		名金 The Broken Coin
1916年2月	黒箱（案） The Black Box 2/07 開鑰之總鑰（開鑰鑰匙） The Master Key 2/15	
1916年3月		カスリーンの冒険 The Adventures of Kathlyn 拳骨（エレヌの勲功） The Exploits of Elaine 黒い箱 The Black Box
1916年4月	賀（愛）倫女冒険捕盜 The Hazards of Helen 4/01-	

<sup>25</sup> 『日本映画発達史』第1巻「活動写真時代」pp.254-255。

<sup>26</sup> 日本での公開時期については『20世紀アメリカ映画事典 1914-2000 日本公開作品記録』による。



秘密女子と國寶

年月	上海	日本
1916年 5月	寶蓮遇 (歴) 險記 The Perils of Pauline 5/05	拳骨 (エレヌの新勲功) New Exploits of Elaine 百万弗の秘密 The Million Dollar Mystery
1916年 6月		ヘレンの大冒険 - 女電信技手の危 難 / 同 - 急行列車の危険 / 同 - 放 れた列車 / 同 : 7月 / ヘレンの冒険 No.13 1917/1/20 / 同延長工事の 巻4/10 / 同危機一髪 No.102 1917/ 5/13 / 同誰が罪1917/6/18 / 同貨 車逸走・贋造紙幣・十四号列車・ はね橋の危険・ヘレン・行止りの巻 1917/7/25 / 同荒馬1917/7/31 / 同 駅の猛犬 1918/5/11
1916年 7月	半文錢 The Broken Coin 7/07	國寶 (ルシル・ラブ) Lucille Love, the Girl of Mystery
1916年 8月	貴族旅館奇巧偵探大案 Mysteries of the Grand Hotel 8/04	
1916年 9月	逃走新娘娘 Runaway June 9/01 百萬金秘密偵探案 The Million Dollar Mystery 9/09 (掌上) 紅圈記 The Red Circle 9/22	拳骨 (エレヌ物語) The Romance of Elaine 獣魂 (曲芸団のベックの冒険)
1916年10月		第二遺産 The Perils of Pauline eps.2 10/14 / 第一遺産10/17 / 第三遺産10/21 ポーリン (遺産改題) 10/2 / 第五 ポーリン11/04 / 第六11/11 / 第七 11/18 / 第八11/25 / 第九12/02 / 第十12/09 グラフトGraft 10/25
1916年11月	空中金鋼鑽大偵探案 The Diamond from the Sky 11/13	快漢ロー Liberty-A Daughter of the U.S.A.
1916年12月	鐵手 (爪) The Iron Claw 12/11	女ロー The Girl from Frisco
1917年 1月 1917年 3月		金剛星 The Diamond from the Sky 赤輪 The Red Circle 3/01 紫の覆面 The Purple Mask 3/10 護る影 The Shielding Shadow 3/24

年月	上海	日本
1917年4月		名玉 Zudora 4/05
1917年5月	妖黨 The Mysteries of Myra 5/17 女偵探蘇都勒 Zudora 5/22	鐵の爪 (アイアンクロウ) The Iron Claw of Laughing Mask 5/08 黄禍/宗旨信狂 The Yellow Menace 5/12
1917年6月		電話の声 The Voice of the Wire 6/23
1917年7月	黄禍 The Yellow Menace 7/12	
1917年8月		グロリア物語 Gloria's Romance 8/11 / グロリア譚1919/5/27 潜航艇の秘密 The Secret of the Submarine 8/27
1917年9月	紅眼睛 The Crimson Stain Mystery 9/13 雙十記 The Mystery of the Double Cross 9/24	ミラの秘密 The Mysteries of Myra 9/29
1917年11月	紫面具 The Purple Mask 11/26 (大偵探) 是非圈鑽石奇縁 The Fatal Ring 11/22	灰色の幽霊 The Gray Ghost 11/10
1917年不詳		覆面の呪 The Neglected Wife / 1918/11/09
1918年1月		大秘密 The Great Secret 1/08
1918年2月	電話怪聲 The Voice on the Wire 2/18 七粒珠 The Seven Pearls 2/18	ダイヤの1 (赤骨牌) The Red Ace 2/09 秘密の王国 The Secret Kingdom 2/28
1918年3月		赤目 The Crimson Stain Mystery 3/15
1918年4月		亜米利加娘 American Girl, Black Rider of Tasajare 4/01
1918年5月		七真珠 The Seven Pearls 5/27 幽霊船 The Mystery Ship 5/31
1918年11月		運命の指輪 The Fatal Ring 11/02
1918年12月		的の黒星 The Bull' Eye 11/30 婦人記者

秘密女子と國寶

年月	上海	日本
1918年12月		The Active Life of Dolly of the Dailies 12/31
1919年1月		戦闘の跡 The Fighting Trail 1/18 獅子の爪 The Lion's Claws 1/25
1919年2月	黒衣盗 The House of Hate 2/03 奇怪船 The Mystery Ship 2/06	
1919年4月		呪の家 The House of Hate 4/14
1919年5月		伯林の狼 Wolves of Kurtur 5/02 真鍮の砲弾 The Brass Bullet 5/31
1919年7月		佳人の復讐 Vengeance and Woman 7/26
1919年8月		曲馬團の囮 The Lure of the Circus 8/01
1919年9月		人間タンク The Master Mystery 9/26
1919年10月		赤手袋 The Red Glove 10/18
1919年11月		ナンバー・ワン Who is "Number One"? 11/15 強力エルモ Elmo, the Mighty 11/24
1920年1月		鐵の手袋 Hidden Hand 11/30 深夜の人 The Midnight Man 1/24 電光石火の侵入者 The Lightning Raider 1/31
1920年2月		幽霊騎手 Hands Up 1/31
1920年3月	紅手套 The Red Glove 3/22	虎の足跡 The Tiger's Trail
1920年4月		曲馬團の秘密 The Iron Test 3/06 星の魂 The Great Gamble 4/10 沈黙の秘密 The Silent Mystery 4/24 ラヂウムの大秘密 The Great Radium Mystery 4/24
1920年5月	德國大秘密 The Black Secret 5/31	空中魔 The Carter Case 5/08 闇黒の秘密 The Black Secret 5/21 運命の財宝 The Fatal Fortune 5/29

年月	上海	日本
1920年6月		蛸の手 The Trail of the Octopus 6/12
1920年7月	羅蘭歷險記 The Adventures of Ruth 7/19	蛮勇旅行 Bound and Gagged 6/15 ライオン・マン The Lion Man 7/01 鷹の追跡 The Hawk's Trail 7/03 鐵腕の響 A Fight for Millions 7/03
1920年8月	怪十三 The Mystery of 13 8/28	大旋風 The Whirlwind 8/13 百万弗懸賞 One Million Dollar Reward 8/13 鐵火プライス Lightning Bryce 8/20 無敵エルモ Elmo the Fearless 8/28
1920年9月 1920年10月		猛虎の脅威 The Tiger Band 9/27 13の秘密 The Mystery of 13 10/01 雲岳の危難 The Perils of Thunder Mountain 10/20 ルスの冒険 The Adventures of Ruth 10/20 剛勇ジャック Daredevil Jack 10/29
1920年11月		消ゆる短剣 The Vanishing Dagger 11/05
1920年12月		肉弾の響 The Man of Might 12/31

一応、1920年末までで区切ったが、先にも述べたとおり連続活劇はその後も上映され続けるが、ここままで大勢は概ね理解ができよう。1915年から始まった連続活劇の上映は、当初は『ルシル・ラブ』や『マスター・キー』『半文銭／名金』『カスリーンの冒険 *The Adventures of Kathlyn*』のように、多少の時差はありながら、両地に均しく導入されているものの、上海では人気を博しながら日本では公開さえされていない

い作品があることにも眼が惹かれる。たとえば、『雙美復仇記（別名三心牌／三心牌雙美報仇記）*The Trey o' Hearts*』は、すでに1915年7月2日から愛倫活動影戲院で上映された後、中国人街に新規開業した共和活動影戲院が、開幕間もない時期の9月から放映を行った連続活劇で、米ユニバーサル社が送り出した15話31巻の連続活劇であり、双子の姉妹が様々な事件に遭遇する展開だ。これを、中国人街で興行にかけた点は、相当意欲的な取り組みだったと見えるし、また、外国映画（洋画）を外国人及び外国映画ファンだけでなく、中国人映画愛好者にも受け容れられると見込んでの上映であろうから、それなりに客を呼べると踏んだ上での放映興行だったものと推測できる。

上海での連続活劇の放映作品がすべては特定できていないので即断はできないが、また1920年以降の追跡調査が十分ではないため、数量としては日本での公開上映の方が、特に1920年代では上回って見える。しかし、1915年から1916年にかけての早い時期では、上海の方が逆に先行しており、日本で放映されなかった作品も、上記の『雙美復仇記（三心牌）』があるほか、『貴族旅館奇巧偵探大案 *Mysteries of the Grand Hotel*』『雙十記 *The Mystery of the Double Cross*』等があることが注目される。上海での連続活劇放映は、実際には日本での盛行と遜色なく、数量的にも大きな差はなかったものと推測する。反対に、日本では評判を取り、なおかつ上海で大人気の Pearl White 主演であるにも拘わらず『エレヌの新勲功 *New Exploits of Elaine*』などは、上海ではその放映の痕跡が見出せない。上記の一覧から見て、製作会社ごと、たとえば Universal は日本の方が先だとか、Pathé は上海の独壇場とかの傾向や、もしくは主演俳優による好悪とかありそうにも思えるのだが、上記のように Pearl White が意外に抜け落ちていたり、あまり有意な傾向性は見出せない。さらに、上海でのみ放映された『雙美復仇記（三心牌）』は、製

作会社が Universal であるのに、なぜ日本では公開されなかったのかと首を傾げざるを得ないことにもなる。この他に別の指標を立てて、上海での連続活劇放映のフィルム選択と日本でのそれとの間に、何らかの法則性を見出したいのだが、目下のところなかなか妙案が浮かばない。

こうした作品ごとに、何が先行し何が後回しになるか、何が先陣を切り何が後塵を拝するか、この間に何らかの系列性や法則性のようなものがあるとすれば、そこに配給者の存在を見出すことが必要になると思う。すでに拙著の中でも述べたことだが、目下のところ、Pathé（パテ）の影が見え隠れする程度で、それがどの程度東アジア、中国、日本で市場を占めていたのか確たる証拠を究明するには到っていない<sup>27</sup>。ただし、配給元の自立、独立と関連するとも考えられるが、これらが放映された1914年から1916年頃にかけて、上海では日本とは別の独自の映画供給態勢が調い始め、イタリア長篇歴史大作の際のように日本のフィルム供給に依存しなくなったということは認められようか。

## 7. 結び一日中の一体性と分岐

以上、一つの同じ映画『ルシル・ラブ』が、上海では『秘密女子』として公開され、日本では『國寶』と訳題を付けられて放映されたことを手がかりとして、上海と日本での外国映画（洋画）の採り入れ方の一斑を見た。ここから、同じ東アジアに位置する映画市場における差異と共通項を見出そうと考察を試みた。ここから窺えること、すなわち1910年代半ばの日中における外国映画（洋画）の導入受け容れの特徴、差異と同一性を一応まとめておく。

(1) イタリア長篇歴史文芸作品では、『ジャンヌ・ダルク』の破例はあ

---

<sup>27</sup> 拙著『銀幕發光』第4章第2節(4)興行配給会社の存在—フィルムの調達および終章(3)世界の映画配給網と映画館を参照。

るものの、概ね東京から上海への上流下流の流れが顕著で、ほぼ同じ作品を共有していた。

(2) フランス製犯罪探偵劇では、『ジゴマ』は日本が先で、これに刺激されて撮影された『ファントマ』は上海が先で、前後が入れ替わっている。その後の『プロテア』等では個別的に放映され、どちらが先行とかは判定しかねる。

(3) 犯罪探偵劇の流れを汲むとされる連続活劇では、必ずしも東京が上流で上海が下流という固定的位置付けではなくなる。作品ごとに、後先がバラツキ、先行するとか遅れるとかに何らかの法則性を見出すことは出来ない。また、上海では上映されたものの、日本では公開されない作品もあり、人気を博す度合いも両地では相違がある。

(4) アメリカコメディが怒濤のように押し寄せる1910年代後半に入ると、ますます東京と上海との先後関係の図式は成り立たなくなり、導入する作品の選定も含めて、上海と東京では別個のルートによる移入（日本では「輸入」のため税関での検査を経て課税対象であったが、上海ではただ持ち込む「移入」であった）が行われていった。先に挙げたチャップリンの『恋の20分間』も、上海では1915年3月に2度放映された後、翌1916年6月にも再度別の映画館で放映される比較的人気作品であったが、日本で公開された記録は見出せないくらいなのだ<sup>28</sup>。

最後に、こうした映画作品の導入経路の差異によるのか、そこで放映される際の題名にも少なからず影響を与えていることに注目しておく必要があることを強調しておきたい。

---

<sup>28</sup> 『20世紀アメリカ映画事典 1914-2000 日本公開作品記録』による。

訳題の懸隔

原題	中国題	日本題	日中先後
Lucille Love, Girl of Mystery	秘密女子	國寶	中／日
The Master Key	開鑰鑰匙	マスター・キー	日／中
The Adventures of Kathlyn	柯絲倫遇險記	カスリーンの冒険	中／日
The Perils of Pauline	寶蓮遇險記	遺産／ポーリン	中／日
The Broken Coin	半文錢	名金	日／中
The Mysteries of Myra	妖黨	ミラの秘密	中／日
The Hazards of Helen	賀倫女冒険捕盜	ヘレンの大冒険	中／日
The Trey o' Hearts	三心牌 (雙美報仇記)		中のみ
The Exploits of Elaine		拳骨 (エレヌの勲功)	日のみ

この訳題の相違からは、少なくとも上海では、上海先行の作品、つまり直接上海に持ち込まれたと推測される作品では、比較的原題に近い訳題が充てられることが多いように見える。一方、イタリア長篇歴史大作での『ジャンヌ・ダルク』の例では、日本では想像だにできない『巾幗英雄』のような中国的題名が与えられており、ここからはこれが日本を経ない中国独自のルートでの導入だということが示唆されよう。また『*The Mysteries of Myra*』の場合、上海では『妖黨』として内容に即した意識が充てられたのに対し、日本では『ミラの秘密』と直訳に近い題名を与えている。これも日本より先行した経緯から見て、日本とは関わりなく中国独自の命名であり、原産国から直接導入したことを推測させる。つまり中国独自の導入の場合は、原題の直訳に近い題名が与えられる場合もあるものの、上表に見るとおり、たとえば『寶蓮遇險記』や『柯絲倫遇險記』のように音訳を採りながら中国伝統の小説や戯曲の題名方式に則って、いわば「音訳+意符」題名の方式で題名が与えられる場合が



目に着く。

1920年代に入り、怒濤のようにアメリカ映画が導入されると、外国映画（洋画）の訳題は、より一層この中国式題名に則った命名が幅を利かせるようになる。たとえば、1923年2月8日に「上海屈指の映画館」を謳い文句にカール登（Carlton）大戲院が開幕したが、そのこけら落とし興行で放映された映画は『盧宮秘史』と題された。この原題は『*The Prisoner of Zenda*』だが、同じく日本でこの作品が1923年3月15日に公開された際には、より原題に近い『ゼンダ城の虜』との題名が付与された<sup>29</sup>。これも上海が先行したわけだが、この際の訳題の充て方は、中国独自の命名法で原題との懸隔は甚だ大きいながら、中国の芝居や大衆小説の題名に近い題名の取り方で、観客に対する訴求度がより高まることが期待されたと思われる<sup>30</sup>。

今後の探究の方向として、1920年代に入ってアメリカ映画が大量に導入されて以降、外国映画（洋画）の題名がどのように命名されていたかを探る必要が見えてきた。目下のところ確たる立証はできていないが、これを一応の目星として本稿の結びとしておく。

附記：本稿は、2021年2月24日に大学院言語文化研究科において開催した「三分野にわたる地域言語文化研究の批評と実践の会」で、オンラインで報告したものに手を加えてまとめた。

---

<sup>29</sup> 『20世紀アメリカ映画事典』による。

<sup>30</sup> 『*The Prisoner of Zenda*』は、アンソニー・ホープ（Anthony Hope）の原作小説が、30年前の1894年に商務印書館から『盧宮秘史』の題名で翻訳出版されており、この小説式の命名に準拠したという側面がある。

### 【主要参考文献】

- (1) ジョルジュ・サドゥール『世界映画全史』（村山匡一郎・出口丈人・小松弘訳、国書刊行会、1993）。
- (2) 田中純一郎『日本映画発達史』（中央公論社、1975年中公文庫版）。
- (3) 大野裕之『チャップリン・未公開NGフィルムの全貌』（日本放送出版協会、2007）。
- (4) 山本喜久男『日本映画における外国映画の影響—比較映画史研究』（早稲田大学出版部、1990）。
- (5) 拙著『銀幕発光—中国の映画伝来と上海放映興行の展開』（作品社、2019）。
- (6) 畑暉男編『20世紀アメリカ映画事典1914-2000日本公開作品記録』（カタログハウス、2002）。
- (7) Buck Rainey『*Serials and Series — A World Filmography, 1912-1956*』（McFarland & Company Inc. Publishers, 1999）。

### 【図像来源】

- 図像1. 『申報』1913年5月24日。
- 図像2. 『申報』1913年6月3日。
- 図像3. 『申報』1913年7月29日。
- 図像4. 『申報』1913年12月1日。
- 図像5. DVD『*Inferno music by Tangerine Dream*』（Eye 4 Films Ltd. & Snapper Music/ SDVD513）よりキャプチャー。
- 図像6. DVD『*Quo Vadis*』（Art-Films）よりキャプチャー。
- 図像7. 8. 9. DVD『*Fantômas*』（KINO International Corp. 2010）よりキャプチャー。

図像10. 11. 12. DVD『Chaplin at Keystone』（Flicker Alley LLC、FA0018、2010）よりキャプチャー。

図像13. 14. DVD『The Perils of Pauline（1914）in 9 Episodes』（Grapevine Video）よりキャプチャー。